転生先にて…

砂くじら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生先にて…

【Ｎコード】
Ｎ３３９４Ｉ

【作者名】
砂くじら

【あらすじ】
バイクで事故にあった主人公がゼロの使い魔の世界に転生してしまう話です。

ぷろろ～ぐ（前書き）

初めて書くのでおかしな点があるかも知れませんがよろしくお願いします

書き直しました。

ぷろろ〜ぐ

その日、帰り道をバイクに乗って帰っていた。

時間はもう間もなく日付が変わろうとしている頃だったかな？

いつものように睡魔と戦いながらいると対向車線を走っていたトラックが突っ込んできやがった。

もうだめだと思った瞬間に今までの出来事が頭をよぎった、ああこれが走馬灯なのか。

机から物が落ちるのを見ている時のように世界がゆくっりと動いている。

次の瞬間、全身をものすごい衝撃が襲ってきたと思ったら目の前が真っ暗になった。

次に意識がはっきりしてきた時、目に入ってきたのは見慣れない天井だった。

自分の部屋の天井はこんなきれいでは無いし、病院の天井はこんなに上品では無い。

今の状況について色々考えたかったが睡魔が大軍で襲いかかってきやがった。

睡魔との戦いに勝てず眠りについた。

朝になって目が覚めたのでとりあえず起きて周りの様子を見ようとしたけれど体が思うように動かない。

違和感を感じて自分の手を見ようとしたらそこにあったのは赤ん坊の手だった。

なぜ？

その事実に驚いているといつの間にか誰かが隣に居た。

隣に居たのは綺麗な女性だった。

女性は「あら、もう目が覚めたの？それじゃあみんなの所へ行きましょうか。」と言い俺を抱き移動を始めた。

この時になって自分が赤ん坊になったという事をようやく理解することができた。

こうして俺は前田　陣という人生に幕を下ろし、前の記憶を待ったまま新たな人生が始まったのだった。

ぷろろ〜ぐ（後書き）

誤字脱字があれば教えていただけると幸いです。

始まり

転生してから色々な事が変わりすぎた、一番最初に変わったのは名前だ。

生まれ変わったのだから当然なのだが日本人らしい「前田　陣」という名前から「レイス・スコット・ファ・ラ・ロンドウェル」という外国人丸出しの名前になっちまった。

名前長すぎ！

一番変わりやがったのは世界の方だ。

『ハルケギニア』

それが今いる世界の名前らしい。

中世ヨーロッパぐらいの文明で貴族や魔法、ドラゴンが存在している何ともファンタジーな世界。

小説やアニメなどによくある設定かよ！

新しい人生での俺の立ち位置はトリステインの貴族であるラ・ロンドウェル侯爵家の四つ上の兄と三つ上の姉をもつ次男だ。

父は軍人としてなかなか名を上げた人物であったが長女を産んでから妻が亡くなって落ち込んでいるときに昔からの付き合いのある商人が自分の家族と励ましにやってきて。

「父親であるあなたが落ち込んでいて子供はどうするのよ！男ならもっとしっかりしろ！」

と父を見た商人の娘である母が貴族に対して失礼な態度で叱責したらしい。

貴族に対して失礼な態度をとれば平民は殺されても仕方がないのが当たり前の世界だったので商人の男やその妻は自分の娘抑えようとしたが、自分の親の制止を振り切り言葉を続けた。

「あなたが落ち込んでいれば産まれた娘は次第に自分が産まれたから母親が死んだと自分を責めるようになるかもしれないのよ！子供にそんな思いをさせておいてあなたは平気なの？」

その言葉を聞いて父は初めて反論した。

「平気なものか！だがどうすればいい？私は最愛の妻を亡くしてしまったんだぞ！妻の死は仕方が無かったと諦めて妻のことを忘れて明るく生活しろと言うのか！」

「奥方のことを忘れろとは言わない、しかし自分の妻の死を受け止めて立ち直ればいい。立ち直るまでどれだけ時間がかかるか分からないがせめて子供の前だけでも明るく接したらどうだ！子供だって悲しいんだ、父親がいつまでも目の前でメソメソしていてどうして子供が笑うようになる！」

この言葉を聞いて父は次第に以前の様子に戻るようになったいった。

そして、立ち直ってから母と何度か会っているうちに母に惚れて

求婚するも断らた、しかし何度も求婚しとうとうＯＫをもらい「平民の娘との結婚なんて。」という周囲の反対を聞かず結婚。

母と結婚してからは母と協力して領地の発展の為に取り組んでいる。

母は商人としてやり手であり、父と母の役に立つためと言って剣をはじめ、たまに傭兵として金を稼ぐことがあったため剣の腕前も一流である。

そんな母の困りごとは同性にモテルことだった、性格は男勝りだが一方で普通の女性と同じで素敵な結婚を夢見ていたからだ。

そんな母が同性にモテルのは、貴族や酔っ払いなどに絡まれている娘などがいると助けに入り相手をコテンパンに叩きのめすからだ。

助けられた方は絡まれて困っているときに見た目麗しいカッコイイ女剣士に助けられてお礼を言うと素敵な笑顔で「あなたが無事でよかった」と言われ母に惚れてしまうのだ。

仲の良い傭兵たちからは「そこら辺の男よりアンタの方が漢だぜ。」と笑われていた。

本業の商人と副業の傭兵としていろいろな所でいろいろな人と会ったことから幅広いツテを持っていてその事で父支えている。

そんな二人が俺の両親だ。

俺は五歳から魔法を習い始めた、前の世界では魔法など夢物語だったので魔法にのめり込み六歳でライン七歳でスクウェアの実力の

風のメイジでその上達の速さから『風の申し子』と周囲から呼ばれていた。

また、父から戦いの心得、戦術・戦略を、母から商売の仕方、薬草などを使った傷や病気への処置の仕方、剣や銃の扱い方、メイジや格上の相手との戦い方についても頼んで教えてもらうことに成功した。

兄と姉は新しい母親のことを慕っていたため腹違いの弟でも気にせず、よく三人で遊ぶことが多い。

九歳の頃に父の行っていた領地の発展のために色々な意見をし始めた。

まずはじめにしたのは領地内の上下水道の整備、これを行ったことにより衛生環境や生活水準が向上することに成功。

次は学校を設立した、これは平民でも文字が書けるのは少なかったため学校といっても読み書きと計算を教えるだけだったが喜んでくれたのでやったかいはあった。

次は農業の向上をした、今までは農地の改良を行うには痩せた土地にただ魔法だけをかけてその農地を豊かにする方法だったが、このやり方だと使う魔力の割りに豊かになる土地が少なく、土のメイジに払うお金の額が上がってしまうため効率が悪いので集めてきた落ち葉や残飯や生ごみなどを発酵させて肥料にする方法に変えてもらった。

次は商人ギルドというものを作った、これに入ればラ・ロンドウェル侯爵が自分達の上司になるような物で売上の三割を支払うこと

でラ・ロンドウェル侯爵領での関税などが無くなるのと様々な援助が受けられるようになるなどメリットがあるしかし、入るのに審査を受けなければならず入っても守らなくてはいけない決まりがあり違反者は違反に応じた罰が与えられる、これにより商品の質が上がり価格は今までと同じかそれ以下にすることができた。

十歳になった。

前の人生で三十三歳だったので精神的には四十三歳。

もう立派なおっさんかと思うと泣ける。

俺は自分の部屋で風石を使った新しい浮遊機関の試作品を作っている。

見た目は厚さ１０？ほどサーフボードを小さくしたような板である、しかし板の後ろに二つと裏に四つの穴が開いている。

この世界には空中船があるがそれは風石で船全体を浮かし帆で風を受けて進む、というものだった。しかし、それでは効率が悪いと思い新しい浮遊機関を作ろうしていたのだった。

もともとバイクをいじるのが好きだったのでこういった作業は得意だったので半年をかけて試作品を何とか作ることに成功。

できた試作品に風石をセットし浮かぶのを確認し浮いたので乗ってみる、乗ったときは僅かに沈んだがすぐに持ち直し安定して浮く。

足で床を蹴り前へ押し出すとスケボーのように動きだし、左右の

体重移動で方向転換をすることができなかなか楽しい。

足もとにあるボタンを踏もうかどうか迷うぜ。

これを踏むと後ろの穴から風が吹き出し前へ進むようになっている、まるで某少年探偵の改造スケボウのように。

迷っていると部屋の扉がノックされた。

「レイス様昼食の用意ができました。」

もうそんな時間か。

「分かった、今行くよ。」

メイドが呼びにきたのでボタンの実験は昼食後に外で行うことにして試作品の実験を中断し返事を返した。

昼食の席で父に浮遊機関の試作品ができたことと外で実験をすることを伝えたら家族全員が見にきた。

見られると緊張する。

頼むからそんなに凝視するな！

いつまでも立ってもしょうがないから準備を始めるか。

試作品を浮かせその上に乗り動いた時に落ちないように足を板のくぼみに引っ掛けてボタンを踏む。

動き出しは遅かったが徐々にスピードが上がる。

ゆっくり動いてもしょうがないか、最高スピードがどれくらい出るかも試すか。

足をさらに踏み込む。

馬が走るより少し早い速度まで出ることができた。

成功したのを確認することができたので未だに驚いている家族のもとに行き成功を報告する。

「これがお前の作った浮遊機関か？」

父が驚きを隠せない様子で言った。

「はい、でも試作などでこんな規模ですから後は実際に船を浮かせて積荷と船員、乗客を乗せても大丈夫なように改良しなければいけません。

ただ試作品は自分の小遣いで作れたのですが船用の方は資金と人手がいるので父上に協力していただかなければ無理ですね。」

「そんな事ならいくらでも協力するからできるだけ多く作ってくれ。」

「分かりました。」

その日から半年でラ・ロンドウェル侯爵が所有する商人ギルドに所属する商人の商船や独自の大小様々な戦闘船などの空中船は飛行速度、風石一つあたりの飛行距離、機動力でハルケギニア一の性能

を誇るようになった。

そして様々な国や商人達から自分の所に売ってくれと頼まれるようになったが浮遊機関の耐久性や問題点があるかどうか、あった場合はそれの解決、今までの空中船と違う所がいくつもあるため船員の教育、生産に時間がかかるなどの問題があることを理由を建前に売るのを断っていた。

そしてラ・ロンドウェル侯爵家が所有する商人が今までより空中船と飛ばすときに出る経費が減ったおかげで貿易が盛んになり、それを聞きつけた他の商人もラ・ロンドウェル侯爵家の商人ギルドに加わりたいとやって来たのでラ・ロンドウェル侯爵領は今やハルケギニアの貿易の中心となった。

始まり（後書き）

書き直しました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3394i/

転生先にて…

2010年12月29日02時11分発行